

東京・地方の対流を促す教育プログラム開発と 持続的なプログラムとしての自立を目指して

天野 浩史

大正大学 地域構想研究所 藤枝支局
(静岡県藤枝市)

藤枝支局立ち上げ2年目を迎え、大正大学を責任大学として採択された内閣府学生対流促進事業（以下、対流促進事業）に関わる藤枝エリアのコーディネート、また大正大学の事業関連法人でもある現地法人「一般社団法人ミライヌ」として、事業研究に取り組んだ1年だった。対流促進事業においては、昨年同様、地域創生学部の地域実習期間内に大正大生15名が、静岡産業大学との単位互換科目「しずおか学」の受講を通じた産業大生との学び合いに参加。また令和元年度は、静岡産業大学生が大正大学の大学祭を視察するツアーを企画し、事前説明会にて大正大生が学部の取り組みを説明する機会を設けた。10月20日には、同じく対流促進事業に関わる島根大学生も加わり、大正大学にて3大学の学生交流企画が実現した。昨年以上に学生対流の質が高まり、それぞれの大学での学びの共有、触発が起きる機会となった。



また8月18日（日）から8月22日（木）にかけて、対流促進事業「夏の短期プログラム」を実施。昨年度の反省を踏まえ「一過性のプログラムではなく、持続的に地域と学生の対流が生まれるプログラムを目指す」という目標を掲げた。令和元年度は新たに「テクノロジーの変化でローカル企業はどう変わったか／変わるか？」というテーマのもと、参加希望学生が探究課題を決定。それに合わせた3つのプログラム「インターンシッププログラム」「フィールド調査プログラム」「社会実験プログラム」を実験的に企画し、6名の学生が「テクノロジー」「ローカル企業」「変化」というキーワードでプログラムに取り組んだ。ここでは、それぞれのプログラム内容、成果を報告する。

インターンシッププログラムでは、株式会社共立アイコム、株式会社サンロフト、有限会社人と農・自然をつなぐ会にて、3日間インターンシップに取り組んだ。学生たちがそれぞれの企業にて就業体験、営業同行や会議参加を通じて、テクノロジーの変遷や実務でどのように取り入れられているかを観察し、成果報告を行なった。中でも、有



限会社人と農・自然をつなぐ会にてインターンシップを行なった学生 A (地域創生学部 3 年生) は、その後の地域実習においてもインターンシップを継続し、協力関係を築きながらイベントの支援をするなど、連続的な関係構築、地域活動へと発展をさせることができた。2 月には学内で有志を募り、再び地域を訪れ、交流を継続している。

フィールド調査プログラムでは、「地域実習で、売り続けられる商品開発をしたい」という目標を持つ学生 B (地域創生学部 3 年生) が、3 日間で約 20 店舗の藤枝市内の個店を調査・ヒアリングし、特徴や強みを分析した。加えて、そこで具体的な地域実習でパートナーとなる店舗の目星をつけ、実習期間中に老舗洋菓子屋ミラベルと大塚園とのコラボレーション商品「CHA. BU. RE: (チャブレ)」を開発。「一過性の商品にしない」という想いもあり、実習終了後も大正大学のアンテナショップ「座・ガモール」での販売や、再び藤枝市にやってくる商品開発の打ち合わせを行うなど、精力的に活動をしている。

「社会実験プログラム」は、「継続的な実験を行うこと」を前提としたプログラムだ。参加した学生 C (地域創生学部 2 年生) は、広報やプロモーションに関心があり、1 年次での地域実習で取り組んだ「Google マップを使った地域資源の PR」を拡張させ、「Google マイビジネス」を利用した個店のプロモーション支援に取り組んだ。短期プログラムでは、藤枝駅南で婦人服の販売や農作物の販売、レンタルスペースの運営を行う藤枝キリンヤをプロジェクトパートナーとして、Google マイビジネスの実装や運用方法の打ち合わせや初期運用を行った。実際に Google 経由でのアクセス数や客層など、今まで感覚的に把握されていたものが定量的に把握されただけではなく、衣料品と農作物販売のシナジー効果の発見や新しい PR の方法など、定量化することによる発見も多く、藤枝キリンヤ代表の秋原氏からも「新しい取り組みで刺激をもらった」と、報告会でコメントをいただいた。学生 C は、現在も東京でアクセス数などの解析を続け、この分野を自分自身のテーマとして、今後も探究を深めていくようである。

短期プログラムでの問いとそれぞれのミッション	
あなたたちへの問い (質問)	
テクノロジーの変化でローカル企業はどう変わったか/変わるか?	
ミッション (このプログラムで果たすべきこと)	
インターンシッププログラム 対象者: _____	受け入れ企業での仕事観察・体験を通じて、企業の仕事や働き方の魅力、テクノロジーとの関係性を調査し、自分の言葉で伝えよ。
フィールド調査プログラム 対象者: _____	藤枝市内の個店の魅力や特徴、テクノロジーとの関係性を調査し、自分の言葉で伝えよ。
社会実験プログラム 対象者: _____	「キリンヤ」における社会実験企画を設計し、持続的に効果のあるテクノロジーの活用を調査し、自分の言葉で伝えよ。



プログラムの効果測定が今後の課題である。これらの新たなプログラムの試験的实施により、それぞれのプログラムによる学生たちの学習の連続性、また地域をフィールドとすることによる継続的なフィールドとの関係構築を見ることができた。また、この成果を参照しながら、令和元年 2 月 18 日 (火) から 22 日 (土) まで行う「春の短期プログラム」では、課題調査・提案・活動型プログラムとして、藤枝市にある有限会社佐野石材と連携し、経営課題に対して調査・提案を行うだけではなく、その後も継続的に提案実現に向けた活動を行う形式で実施を予定している。私たちが想像している以上に、学生たちは授業期間以外も地域を訪れ、また地域で生活者とともに活動をしたいという意欲が高いことを、令和元年度のプログラム開発を通じて感じている。また大正大学に限らず、連携している静岡産業大学はじめ、県内外の学生たちは、機会と支援があれば、効果の高い学習や持続的な活動発展へと結びつけられるのではないかと、ということにも気づくプログラム開発だった。今後、よりその効果を客観的に示しながら、地域に根付く事業として、地域社会に対しての価値創出へと発展させていきたい。 以上